



近畿洋菓子コンテスト(Cクラス)に
初出場、初優勝を飾つて以来、
毅は毎年、優勝を重ねた。

ついには、A・B・Cクラスにわたり、
前人未踏の「10連勝」を果たした。
この頃、あまりに何度も
優勝するので、もうコンテストには
出ないでくれ、と言わされたほどだった。

情熱の洋菓子職人

The artisan spirits ~Tsuyoshi Hiyane Story~

比屋根毅物語

漫画：佐藤晴美





休日ともなれば、
デパートや家具店、
美術館などに行き、
デコレーションづくりの
眼をやしなうことに
費やしていた。



聞きしに勝る
勉強熱心な方だ。
いいでしよう。
その条件、
お受けしましょう。

株式会社
大賀製菓

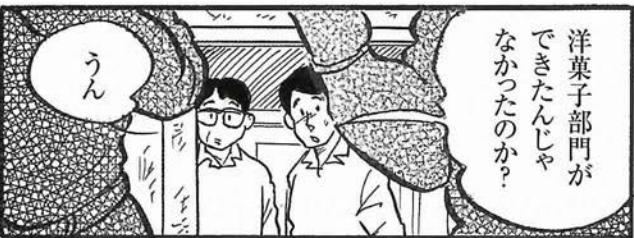
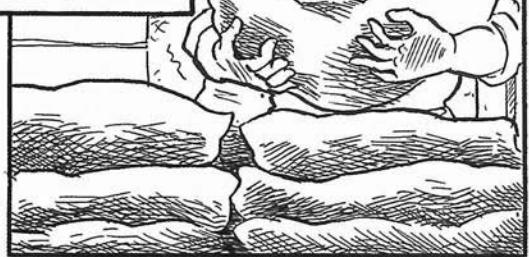
技術をみがくには、
まず体力！
そして心を磨く！
それが大切です

皆さんには、
お菓子づくりよりも
まず体力づくりを
していただきます

はじめまして
比屋根です



毅はまず、空手の訓練や
礼儀作法などを部下たちに教えた。
先に、精神力や、気力をやしなうことが
大切だと考えたからである。





突然お邪魔して

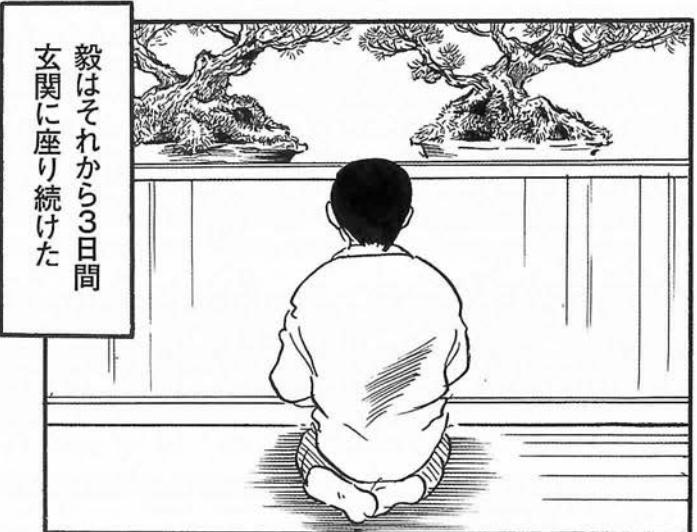
ぜひ先生に

工芸菓子の技術を

学びたいと思って

参ったのです！







ブルーグラス

出石アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

ヨー、フィドル（バイオリン）、フラットマンドリンなどのアコースティックである。テレビのコマーシャルのバックミュージックによく使われている。ラジオ関西の谷五郎さんがやつてゐる音楽といえば分かってもらえるだろうか。

あの興奮、感動は今も忘れられない。

1968年3月6日、大阪サンケイホール。

日本に初めて、本場アメリカから、本格的なブルーラスのバンドがやって來たのだ。

「フォギー・マウンテン・ボーカーズ」

中心メンバーは、レスター・フラット&アール・スクラッグス。その世界では、今も語り継がれる大スターである（アールはまだ元気で活躍している）。その時のステージは、ブルーグラス界では今や伝説のステージといわれていて、見た者は自慢している。もちろんわたしも、あれを見たということが種のステータスなのだ。

わたしは友人と、前から数列目、真ん中より少し右のS席に座つたのだが、会場はオーブニングから興奮の坩堝と化し、一曲終わることに大歓声がわき、アンコールの声が響き、彼らはそれに応えた。今思い出してもわくわくする。「本当に素晴らしい演奏に接するとその体験の記憶は生残る。そればかりではない。鮮烈な記憶は、育ち続けるのだ。」これは最近読んだ本、「すべては音楽から生まれる」（茂木健一郎著・PHP新書）にある一節だが、まさにその通りだと思う。

* *

日曜日、《輪》に軽快な音楽が響くことがある。息子の所属するバンドがたまに練習場所にすることがあるのだ。

ブルーグラスという音楽である。

ブルーグラスは元々わたしが大好きな音楽。カントリー・ミュージックのジャンルで、楽器は、ギター、五弦バンジ

余談であるが、その時一緒に行つた友人Rは、それか

ら間もなく家が破産して行方不明となり、未だに再会していない。今、最も会いたい昔の友人である。

その後わたしは、結婚して子どもができると彼を幼いうちからライブハウスに連れて行った。元町の「ロスト・シティ」という小さな店である。そこは関西のブルーブラスのメッカであった。

マスターの野崎謙治氏は当時、日本一のバンジョー奏者といわれていて、いつも客席の後ろで腕組みしながら若いバンドマンの演奏に鋭い視線を飛ばしておられた(「ロスト・シティ」は1985年、5月10日をもつて惜しまれながら閉店)。

元町駅を降りると息子は、わたしをおいてきぼりにして鯉川筋を南へ、ロスト・シティを目指し、リクエストカードを握り締めて仔犬のように走って行く。センターハー街の南の路地を東に入ると、楽器の音が聞こえてくる。するとまた彼は一段と足を速める。この息子には、わたしの大切なレコードを随分傷められたものである。「一歳ぐらいから自分で引っ張り出して、プレーヤーにかけるのである。汚れた指であろうと、レコードが擦れ合おうと構わない。後になって、「なぜ無理にでもとめてくれなかつた」と言つたものだ。そんなだつたから、やがて自分で楽器を弾くようになり、

マスターの野崎謙治氏は当時、日本一のバンジョー奏者といわれていて、いつも客席の後ろで腕組みしながら若いバンドマンの演奏に鋭い視線を飛ばしておられた(「ロスト・シティ」は1985年、5月10日をもつて惜しまれながら閉店)。



中学三年の時には、「サタディランブラー」と名付けたわたしとの親子バンドを結成して、『輪』でライブを開くようになった。その時の録音テープが残っているが、「絶対に聴きたくない」という。あまりにも稚拙だからと。

彼は今、非常に忙しい仕事に就いているが、バンド活動は続けていて、毎月末の土曜日夜、三宮のライブハウス「ホンキートンク」でバンジョーを弾き、歌っている。

さて先日のことだ。その息子が、「お父さん、これ聴いてみい」と聴かせてくれたCDに驚いた。

パソコンからダウンロードしたのだというそれは、まさかの40年前のあの大阪サンケイホールのライブ盤だったのだ。これまでそんなものがあるとは思つてもみなかつた。話にも聞いたことがなかつた。市販もされてはいない。幻の音である。若き日が蘇つて、たしかに胸がふるえたが、あの時のあの感動は一度と味わえるものではないとわたしは思つている。

ああ、Rに会いたい。

※今回の記事は、月刊ブルーブラス専門誌「ムーンシャイナー」の編集長、渡辺三郎氏の協力を得ました。

■出石アカル(いすしあかる)(一九四三年兵庫県生まれ)。「風媒花」火曜日(同人)。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカップの耳」(編集工房ノア刊)にて、二〇〇一年度第二十回ブルーメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けの ハンター



ハンター商会
兵庫尾留地 29番館



ハンター肖像

新天地松ヶ鼻網干場

明治八年から十年にかけては、ハンター商会の黎明期であった。二年前に兵庫の居留地二十九番館に看板を掲げて以来、ヨーロッパ製の機械や雑貨の輸入で貿易業の基礎を築き始めているところであった。この頃は外国製品といえば、新品でも中古品でも舶来品として珍重されたから貿易を行いうえで、ハンター商会も各種土木建築用機械や一般機械工具類の輸入などで順調に事業の基礎を固めていった。

ハンターは計数に明るく、企画性にも富んでいたから、近代日本の夜明けのなかで、めきめき頭角を現し始めていた。そんな姿を毎日ながめながら愛子は大いに満足であった。しかし、かんじんのハンター自身は貿易業のみには満足しなかつたのである。

「愛子、私ハネ、船造リタイ。ダカラ、今、資金蓄エテイマス」

ことあるごとにそう言う夫を愛子は心底から頼もしいと思う。

「夢は大きく持つて下さいな。私も一緒に夢を見さ

三条杜夫
絵・谷口和市

せてもらいます」

その夢が夢でなくなる時が来ようとしていた。

明治十一年が明けたころ、ハンターが造船所を大阪で設けるための応援をしようとする者が現れたのである。

この四、五年の間にハンターと愛子の間には次男、範三郎と三男、エドワードが生まれていた。愛子は長男、竜太郎を併せて三児の母親となつてゐた。異国人との夫の間にもうけた子どもを育てるかたわら、夫の仕事まで助けた。事務所に訪ねてくる取引先の客の応対をし、子守をしながら湯茶の接待など、こまやかに心くばりをするのであつた。女性の社会進出がほとんどなかつたこの時代にして、愛子は今にいうオフィスレディーのような仕事を手伝いを率先して行うのであつた。ハンター商会では日本のお茶に加えて、商談の機が熟していくといふタイミングで、さりげなく愛子がイギリスのレッドティーを運ぶ。いつしかこれが業者仲間で評判になつていて、レッドティーに添えて愛子が小麦粉を使つて焼き上げたヨーロピアン菓子を出そるものなら、大抵の話しじはうまくまとまる。ハンター商会は人と人のコミュニケーションを大事にする商いの流儀で、着実な進展を続けていた。もつとも、主立つた業務はハンターと支配人の秋月清十郎が担当していることは言うまでもない。このコンビが実に素晴らしい。一回り以上も年長の秋月が目上のハンターを敬い、ハンターも秋月を人生の先輩として立てる。ビジネスの目指すところは見事に一致して、これまでの日本では見

られなかつたようなニュービジネスの展開を示してゐた。

世界を見据え、日本の国民の暮らしが豊かになるよう社会貢献度の高い実業の推進である。それは、もはや一種の社会運動といつても過言ではない内容の事業の推進であつた。

「コレカラノ時代ハ、国ト国トノ交流ガ望マレル。ソノタメニハ世界ノ人々ガ自由ニ行キ来出来ル船ガ必要デス。四方ヲ海ニ囲マレタ日本ハ船ヲ持タネバ、何モ出来マセン」

ハンターの持論であつた。レッドティーを飲みながら口癖の如くハンターが語り続けてきた夢であります。

「ハンターさんの思いが実現する日が近づいてきましたよ」

今や誰よりもレッドティーのとりこになつている秋月が愛子の焼き上げたクッキーをかじりながら言う。

「マイドリームガ現実トナル日ガ近ヅイタノデスカ？」

ハンターがティーカップをテーブルに置いて身を乗り出す。

「はい。門田さんが私たちの考えに大いに賛同してくれましてね。出来るかぎりの支援を約束してくれたんですよ」

明るい表情で秋月が言う。門田という名前にハンターが反応する。

「門田サン？ 秋月サンノフレンド、門田三郎兵衛サンデスカ？」

「そうですよ。今や日本人経営者の間で押しも押さ

れもせぬ門田さんが私たちの趣旨に諸手を上げて賛同してくれたのですよ」

門田三郎兵衛は秋月と親しく交流のある大阪財界の有力者であった。材木問屋を営むかたわら、「撓眠新誌」と題する今にいう業界誌のたぐいを発行して時弊を論じる経済界の雄であった。

秋月の報告が続く。

「門田さんが大阪の支援者ならば、兵庫の応援者として、あの佐畠さんも名乗りを上げてくれていま

す」「佐畠サン？ 兵庫制作局ノ佐畠信之サンデスカ？」

「イエス。兵庫制作局になくてはならない重要人材となつてゐるあの佐畠さんも応援を約束してくれました」

思えば、五年前の明治六年、兵庫鉄工所が兵庫制作局と名を変えて東川崎に移ろうとする時、ハンターと知り合つた人物である。金沢出身の武士然とした男性で、いかにも骨のありそうな好印象でハンターの記憶に残つてゐる人物である。

「兵庫制作局は技術の教習を目的として運営されている官営造船所ですのに、西南の役の影響で、あそこにまで造船の注文が来ているそうです。佐畠さんとしては大阪あたりにも造船所が必要だと思つていた矢先に、ハンターさんの計画を耳にして、大いに賛成し、ためらわざ協力を約束してくれることになりました」

秋月の言葉に熱がこもる。その姿にハンターは

嬉しくなる。

「秋月サンガ頑張ッテクレタコソデスヨ。門田サンヤ佐畠サンガ応援ヲ約束シテクレタノハ、秋月サンノ人柄ヲ信頼シテノコトダカラト私ハ思イス」

「いいえ、私の力ではありません。ハンターさんの人柄だと私は思います」

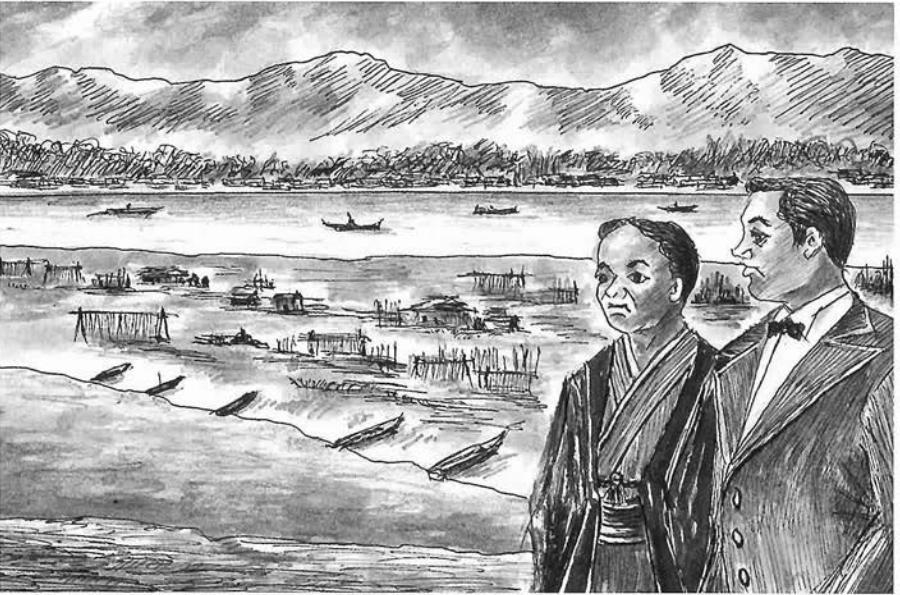
互いに相手を立て合う。この二人の信頼関係を感じ取り、そこを評価してこそ、このビジネスプランなら応援する価値が十分にあると、門田も佐畠も判断したのであつた。

明治十一年の春、桜の花が散り、葉桜に変わろうとするころ、ハンターと愛子は三人の子どもを連れて、大阪の平野家を訪れた。いよいよ、念願の二ユービジネスが具体化することを愛子の父、平野常助に報告するためであつた。幼い三人の子どもを愛子が遊ばせている姿を横目にながめながら、じいやの常助がいかにも満足げな表情でハンターに話すのであつた。

「ハンターさん、何より良かつたことはあの門田さんが応援してくれることになつたことですよ」

門田は大阪財界の雄と評価される人物だけに、自分自身も大阪財界の実力者の一人である常助は門田のことを良く知つてゐる。

「門田さんが応援してくれるのなら大船に乗つた氣持ちですよ。彼はねただの材木問屋ではあります。進取の気性を持った論客で時代の指導者と



私は見ています。『攬眠新誌』は私も読んでいます
が、大したものですよ。時代の先を予知していま
す。そんな門田さんが応援を買って出てくれる
いうことは、その計画が素晴らしいということで
すよ。ハンターさん、本当に良かったですね」
「門田サン所有ノ土地ガコノ近クニアツテ、ソレヲ
可欠の工場用地の提供を申し出てくれている。
使ウヨウ言ツテクレテイマス」

「それは春日出の土地ですか？ 安治川の河口に
彼は広い土地を持つてますからね」
「ソレデス、何デモ松ケ鼻トイウ所ヲ貸シテクレル
ソウデス」

川口居留地の隣りに位置する平野常助商店から
さほど遠くない所に門田が所有する広大な新天地
が存在するのであつた。新天地というのは河口を開
発した時に生まれた新しい土地である。

「松ヶ鼻？ あそこなら理想の場所ですよ。造船所
は海に面した場所がいちばんでしょう。これは願
つたり叶つたりですよ。ハンターさん、明日にでも
案内しましょか？」

常助とハンターが嬉々として話しに夢中になる
姿を見て、愛子の母、菊子が座敷に姿を見せ、言つ
た。

「まあまあ、これはこれはほんとに良かったこと。
今夜は前景気に番頭さんや丁稚のみんなにもお酒
をふるまいましょうか？」

「オ母サン、日本言葉ニアル『念ズレバ通ズ』デス
ネ。コノ平野家ノ近クデ造船所ヲスタートサセル
コトガ出来ルナント夢ノヨウデス」

「もう夢でないでしょ？ 実現するのですから。ほ
んど、良かったこと」

菊子も大満足である。その夜、番頭、丁稚に酒が
ふるまわれた。思いがけない宴席に、使用人たちは
大喜びであった。盃を交わしながら、にぎやかに話
しの花が咲く。
「薬問屋が造船所の応援をするなんて、時代が変わ
りましたなあ」

「あてらも大した店で働かせてもらいますんやなあ」

「それにしても、船に乗つたら酔うと言いまつしやろ？」この平野商店の新製品として船酔いを治す

薬を作るなんてどうでつしやろかな？」

「船酔いしますんか？ どうせなら、船酔いより酒酔いの方があつしは好きでつせ」

「ほな、酒の酔いにも効く薬も考えまひよか」

番頭、丁稚たちのかしましいこと、かしましいこと。滅私奉公が当たり前のこの時代には珍しい使人を大事にする常助、菊子夫婦である。その様を横からながめて、ハンター自身が日本の社会の実態を学んでいく。そこに近代的な西洋の感覚をプラスして、のちにハンター流経営哲学を実践することとなるのである。

使用者たちが盛り上がる隣りの座敷で、常助が

ハンターに言う。

「どうですか？ 明日にも早速、松ヶ鼻へ案内しますよ？ 善は急げです」

「善ハ急ゲ、デスカ？ デハ明日、連レテ行ッテ下サイ」

気の早い常助であるが、それほど娘婿の事業計

画に心を碎いているという証拠であつた。中国の諺に捉啄同時^{ことわざ}という言葉がある。鳥が卵から雛に変わつて殻から外に出る時、親鳥が外から卵をついて殻を破ろうとするのであるが、雛も中からくちばしで殻をついて卵を破る。その作業が同時になければ、雛はうまく殻から外に出られない。ハンターを助けて事業用地の下見に連れて行こう

とする常助と、素直にその好意を受けようとするハンターの二人の呼吸はまさに、捉啄同時を地で行くものである。

平野商店を西に歩いて少し。大阪湾に注ぎ込む安治川の河口一帯が手つかずの状態で、その姿をさりげ出していた。大阪府西成郡春日出。さんざんと降り注ぐ春の日差しをあびて、ちぬの海がきらきらと輝いていた。常助の案内を受けながら、ハンターが感激の言葉をもらす。

「ナイスデス！ コノ海ニ私ノ造ル船浮カベマス」ハンターの頭の中にたちまちにしてイメージが湧きあがる。常助も感慨深い。

「この海から世界の海へとつながつていくのですねえ」

常助が漢方と生薬の薬を扱つて何十年にもなるが、まさか、娘が外国人と結婚するとは思いもしなかつたし、その娘婿が造船所を起こすべく行動を起こすことなど夢にも考えていなかつた。娘婿とおだやかな春の日差しの中を歩きながら、常助がしみじみと語る。

「ここはね、昔、河村端軒が九条島を断ち切つて安治川を切り開いた時に出来た土地ですよ。明和七年でしたかな、川床清右衛門^{川床清右衛門}というお方が新田開発したことから川床^{川床}という地名で呼ばれるようになりました」

南側に安治川が流れ、北側には中津川の支流、六軒家川をひかえて、二つの川の合流点に向かつて

半島のように突き出た土地である。付近の漁師たちが網干場として利用していた。何枚もの大きな網がそこらあたり一面に広げられた雄大な光景を目にしてハンターが言う。

「漁師サンタチノ心意氣ガ感ジラレマスネエ。網干場ノ邪魔ヲシテシマウカモワカリマセンガ、ココハ船ノ係留ニモツテコイノ土地デス。水運ノ便モ良イシ、造船所ヲ作ルノニベリーグッドデス」

住所で言えば六軒家新田の松ヶ鼻である。現在の住所では大阪市此花区北安治川通四丁目にあたる。ここに、造船所を造りたいとハンターの心は固まつたのである。常助が説明する。

「この土地の今の所有者は門田さんです。彼が協力を申し出してくれているのですから、これ以上の最適地はないですね。工場を建てる資金など私も応援させてもらいますからね」

娘婿の事業を応援することは常助にとっても嬉しいことである。出来るかぎりの資金援助をしてやろうと常助は本気で考えているのであつた。

「オ父サン、アリガトゴザイマス。ヨロシクオ願イシマス」

ハンターが頭をさげる。一人の頭上に海鳥が舞つてゐる。その鳴き声が、まるで二人を応援するかのように聞こえる。干潟には餌をついぱむ海鳥。実にのどかな明治十一年の春である。

「あなたあ、お父さん」

突如、遠くから女の声が聞こえてきた。愛子だつた。人力車に乗つて、子どもたちを連れて、夫と父のあとを追つてやつて來たのであつた。渚の近く

で止まつた人力車から三人の幼子が下り立つ。そのいちばん小さいエドワードをすばやく常助が抱き上げる。

「おう、よく来た、よく来た。かわいいのう。この海にお前のお父さんが船を浮かべるんだぞ。すごいゾ」

よちよち歩きのエドワードにはおずりしながら常助が好々爺に変わる。

「ほうら、よく見ておけ。この海に大きな大きな船を浮かべるんだぞ」

孫に話す喜びはそのまま、常助の喜でもあつた。そんな父と我が子を見て愛子もまた胸がいつぱいになる。

「ここに造船所を作るんですか？ 素晴らしいです！」

太陽に手をかざしながら、愛子は大阪湾の遠くに目をやる。春霞の彼方は紀淡海峡を経て太平洋。そのまたはるか彼方は世界七つの海。考えるだけで胸がわくわくするのであつた。 づづく

三条社夫(きくじょう・もりお)
「フリー・アナウンサー、放送作家。ルボライターを経て、放送業界へ。経験によつて、地域活性化講師としての活動も評価されている。
著書に『いのち結んで』、『宝の道』『福神めぐり』、「そうゆう人たち」など。





店の奥「看板娘」が
あやしげな視線を

マスター
酒井宏光さん



ホワイト一色の店内はなぜか落ち着く

つい立ち寄りたくなる「BAR SAKAI」 フルーツや野菜を使ったカクテルも

高層マンションがいくつも登場しているトアロードの再開発区域。新しいマンション「トア山手フラツツ」の西側一階にオープンしたバー「SAKAI」は、ホワイト一色の店内がクリーンなイメージ。一歩入ればおもての喧騒から遮断され、とてもくつろいだ雰囲気になれる。

マスター・酒井宏光さんは、新神戸オリエンタルホテル(現在のクラウンプラザ神戸)のメンバーズサロン、スカイラウンジ、メインバーなどに計18年つとめたベテラン。北国マティーニで有名なバーテンダー・北国忠彦さんの弟子である。

独立してつくる店は、オーセンティックな感じにはしたくなかったといい、誰でも入りやすいバーを目指したという。なるほど、20代から80代の方まで、お客様の年齢層は幅広く、近所の人もふらりと立ち寄ってくる、気軽な雰囲気。酒井さんの気さくでやさしげな感じも、訪れやすさの要因となっている。

何といってもカクテルがおいしい。フルーツたっぷりのものや、野菜を使ったカクテルも。酒井さんが使うのは、普通より大きめのボストンシェーカーで、振るだけでなく、そこにフルーツや野菜を入れてつぶしたり。お好みを言ってみれば、新しいカクテルの味に出会えるかも。お料理好きの酒井さんは、うずら卵のバルサミコ酢漬けをはじめ、おつまみも自分で作ってしまう。「楽しく飲んで帰っていただきたい」というのが信条の、肩肘張らずにおいしいお酒が飲めるお店。

■BAR SAKAI

神戸市中央区下山手通3-12-1

トア山手フラツツ104

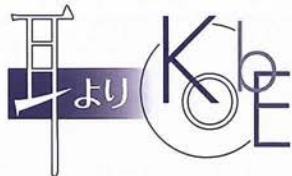
☎078-391-3316

18:00~翌2:00

無休

カクテル900円~/チャージなし。





書棚の組み合せを提案した
ルームセッティング



子どもさんに安全な食器



かわいらしいデザインの食器



4月14日のオープニングで
ログカッティング(丸太を切るIKEA名物)



こんなあざやかな色彩のお部屋は楽しいかも!

スウェーデン発・世界最大級の ホームファニッシングストアが神戸に 「IKEAポートアイランド」オープン

「イケアが神戸に!」とあちこちで話題のIKEAポートアイランド、もう行きましたか?

「IKEA」は、スウェーデンで生まれた世界最大級のホームファニッシングカンパニー(家具・生活雑貨・製造販売)。「ホームファニッシング」とは、自分の好きなようにお部屋の模様替えを楽しむこと。そのためのさまざまな雑貨・家具がそろうのが「IKEA」。

タンスやソファ、テーブルなどの家具から、カーテン、壁紙、食器などありとあらゆる生活雑貨が並ぶ。これまでホームセンターで目にしてきた量産型の雑貨とはちがい、まず何よりもセンスが良い!色彩がきれいでおしゃれなのが魅力。デザイン力には定評のある北欧雑貨ならではのショップだ。自分で持ち帰り、組み立てるのが前提のため価格も安い(宅配サービスもあるのでご安心を)。店内には、スウェーデン料理を中心としたレストランや、スウェーデンピールや菓子、世界的有名なミートボールなどのスウェーデンフードマーケットもある。

すらりと並ぶ、雑貨や家具を見ているだけで、なんだか楽しくなって、お家の模様替えをしたくなってしまう。そんな楽しいストアが登場しました!

■IKEAポートアイランド
神戸市中央区港島中町8-7-1
(ポートライナー「南公園(IKEA前)」駅下車)
www.IKEA.jp

